言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

クリスマスと現代社会

粕谷　甲一
東京教区司祭

(1)

現代社会では、クリスマスは世俗的祭りの年中行事として定着した。そのような風潮の中で、教会がその日を、キリストと共に真に新生する日とするために何かヒントが欲しいと考えていた時、一冊の本に出会った。それは『アウグスチヌス、私のはじまり』と題するＮＨＫ発行の哲学シリーズの一冊で、「近代的自我の淵源を探る」と表記されていた。

その著者は若い哲学教授で、日本の青年達に新生の息吹を伝えたいとして書かれたもので、そのために１６００年も昔のアフリカ人の思想家を取りあげた、その意外性と心意気に深く感じるものがあった。なぜならそのアフリカ人は、カトリック界の教父の父と呼ばれる聖アウグスチヌスであり、かくも世俗化し西欧化した日本の中で何を語ろうとしているのかに心をひかれたのである。キリスト教徒としてではなく、国立大卒の一哲学者として。

そして私はこの哲学者の促しを通じ、この聖者の生涯を、その著『告白』を再読して学び、この聖者の心の秘密を探り、どこに「近代的自我の淵源」があるかを求めて、ついにそれを発見した。それは、この聖者の自叙伝『告白』第６巻15章25節の「あなた」という一語であった。

(2)

彼は、聖モニカと呼ばれる敬虔な母と、息子に世間的な栄達を期待する無信仰の父の間に生まれ、その父の期待を受けてエリートコースを求め、16才で洗礼を受けることなしに大都会カルタゴに行き、そこの放埒な学生達の群れに入り、18才でひとりのアフリカ人女性Ｆとの間に息子をもうけた。彼女は特に差別された最貧困層の出で、法律的にもその階層外の相手との結婚が許されない身分であった。

それから、16年の生活を共にするが、その間彼女の誠実さを疑うようなことは一度もなかったと彼は述べている。その出会いによって、彼は自らも誠実な人生を歩みつつ、自らの本命である学問の道に励み、頭角をあらわすが、彼女と結婚すればその道の前進は不可能となる。父はすでに他界し、母は彼がキリスト教徒として前進することを祈りつづけ、その心を彼も深く理解し、彼女を心から敬愛していたが、他方16年間の伴侶Ｆの献身的誠実さは、彼の存在そのものの中に息づいていた。

この二人の女性の間で彼は悩み、そこにマザーテレサがいう「そこから先はその人と神さまとの間の問題」があり、その聖域こそ「近代的自我の淵源」ではないか。マザーテレサは、終生誓願をたてた修道会を出たのであり、このことも含めて列福されたのではないか。聖モニカの聖性は息子との神秘的一致体験によってもＦを排除せず、Ｆ自らが息子の天与の使命を全うするために自ら身を引くことを決断するまで、待ったのである。そこに聖者の祈りがあった。

(3)

「彼女は決して他の男を知るまいとあなたに誓いながら、彼女が産んだ子どもを私のもとに残してアフリカに帰って行った」（『告白』６巻15章25節）。この彼女の誓いは、異教徒の身分で献げた祈りであり、そしてこの部分は、彼が司教になってから書いた『告白』の一節である。

彼女が去った後、母も息子も他界し、彼は司祭の道に進んでさらに司教になり、やがてラテン教父の父と

呼ばれるような教会の大指導者になった。説教台上から「三位一体の神」を「あなた」と呼んで多くの人を神に導き、今も世界の人々をその「あなた」に導いている。しかし、その「あなた」にFは「二夫にまみえぬ」ことを誓って、彼のもとを去って行ったのであり、その誓願がこの偉大な教父を支えたのである。

彼女は第二バチカン公会議よりはるか以前に、知らずして含蓄的信仰をもって三位一体の神に仕えたのであり、匿名のクリスチャンの道を生きていたのである。彼は彼女の支えで勉強を続け、ローマに行った時、そこの学生達のモラルは二人が出会ったカルタゴの学生達よりもひどいものであった。今の世界を見ても、いわゆるキリスト教国と呼ばれる国々とそれ以外の地方とどちらが「あなた」に忠実であるかは不明である。

アフリカの貧困とその原因を思う時、我々はキリスト教徒としてまた世界第二の経済大国の人間として、馬小屋に生まれてくださった幼子をどのようにしてお迎えしたらよいのか、クリスマスを前にして心から祈りたい。

Q&A…「クリスマスと現代社会」

Q・「カトリック要理」には、イエスさまが馬小屋にお生まれになったのは「わたしたちに謙遜・清貧・忍耐の模範をお示しになるためです」と記されています。それ以外の説明をつけ加えると、かえって本質からそれていくように思うのですが・・・。

A・「カトリック要理」の教えはまったく正しいし、すばらしい説明だと思います。しかし、正しいか正しくないかということと、そのことがわたしたちの生活を実際に生かす原動力となっているかということとは、別の問題だと思います。

神さまのひとり子が人間となってこの地上においでになり、この地球上で生きてくださったのですから、そのいのちがわたしたちの日常生活を実際に生かすものとなっていなければ、クリスマスをお迎えするほんとうの意味を理解している、とは言えないのではないでしょうか。

その「生きた生活」に変えるための試みの一つとして、パピニ（1881～1956）というイタリアの小説家は、その著『キリストの生涯』の中でこんなことを記しています。

「キリストが馬小屋で生まれたということは、偶然ではなかったのだ。この世界は、人間が汚れを作り出し、そして自分もその中にころがっている、一つの広い馬小屋ではないか。人間は毎日、最も美しく、最も清く、最も神聖な物を、汚い排泄物に変えてはいないだろうか。しかも、その汚れたものの上に長々と身を伸ばし、人々は言うのだ。『人生を楽しんでいる』と。汚れた嫌なにおいをおおい消すことのできる何らの飾りも香りもないこの地上の馬小屋に、ある夜、イエスはお生まれになった。」

彼によると、馬小屋とわたしたちの内部の状態とは別物ではない、ということになるようです。

Q．クリスマスということばは「キリストのミサ」という意味だと聞いたことがありますが、「ミサ」とは最後の晩さんを記念する集いではないのですか。

A．確かに、ミサはイエスさまが弟子たちとともにされた最後の晩さんの「記念」です。そこでイエスさまは、パンを「これはわたしのからだである」、ブドウ酒を「これはわたしの血である」と言われて、それをいただく者がイエスさまご自身を自分自身の血とし肉とするよう諭されたのです。

一方、クリスマスの語源について、つまり「キリストのミサ」であるという根拠についてはいろいろな説があるようですが、福音書の記述の中にその片鱗が伺えないこともありません。

というのは、イエスさまがお生まれになった町の名「ベトレヘム」は「パンの家」という意味であり、お生まれになって布にくるんで寝かされたところが、動物の食べ物を入れるための「まぐさ桶」だったというのも、食べ物としてわたしたちに与えられたご聖体を連想させるからです。

どちらにしても、「クリスマス」ということばはイエスさまのいのちを生きるための「いのちのまなざし」が生んだものである、とはいえるのではないでしょうか。

Q．一面で述べられている「近代的自我」ということばも、そのようないのちの視点から言われているものなのでしょうか。

A．そのとおりだと思います。「近代的自我」ということばを使うと何か難しく聞こえますが、たとえば「自分の中心」とか「一番深いところにある自分自身」という言い換えもできるかもしれません。

わたしたちは、先ほどのカトリック要理のクリスマスの意義を正しいこととして受けとめています。しかし、その理解がどこか「他人ごと」の領域を出てはいない場合があります。正しい理屈ではあっても、腑に落ちてはいないのです。つまり、心底から納得してはいないので、「生きたもの」になってはいないのです。

クリスマスだけではありません。ほかのいろいろな教義も、正しいことが分かってはいても、自分の人格をゆさぶりこれを形成するものにまではなっていないことが多いのです。つまり、「自我の形成」に関わってはいないのです。

Q．しかし、教義や掟は正しいものなのですから、文字どおりに受けとめて、忠実に守る必要があるのではないでしょうか。

A．「近代的自我の形成」という発想で考えれば、そのような疑問への解答の糸口は、現代の子どもたちが何か説明のつかない事件を起こした時に必ずと言っていいほど使われることば、たとえば「まじめでおとなしく、成績も良く、いい子だったのに・・・」ということばなどからも見つけ出せるような気がします。

粕谷神父さまが、１６００年も前に生きた聖アウグスチヌスを取り上げて、クリスマスの意義を述べられた背景に、そのような事情があるかどうかは分かりません。しかし、現代っ子は本物の自我形成がなされておらず、そのためにのたうち回っているという面を取り上げれば、共通のものがあるように思います。

現代社会では、正しいか正しくないかという基準さえ怪しくなり、損であるか得であるかということが、唯一の生きる基準になったようにも見えます。そんな中で、本物の自分を探し求めてあえぐ子どもたちの悲鳴は、レベルの差はあっても、聖アウグスチヌスのそれと変わりがないのではないでしょうか。

いずれにしても、「あなた」に出会うまでは安らぎを得ないことだけは確かです。他人ごとではなく自分のこととして、クリスマスを前に「本物のわたし」の誕生を祈りたいものです。

今年のクリスマスが、ほかならぬ自分自身の中で「新生」の実感を伴って訪れますように・・・。

「参加する教会」をめざして（3）

神の計画への参与

はじめに

前回は、「参加する教会」とはどういうものなのかを、「キリストの使命への参与」という側面から考えてみました。そして今回は、もう少し視野を広げて、「神の計画への参与」という側面から考えてみたいと思います。

私たちは毎日、「主の祈り」を唱えるたびに、「み国が来ますように」と祈っています。それは、「神のご計画の実現のために、私たちも何かの協力ができますように」と祈っていることでもあります。なぜなら、「み国が来る」とは「神の国が完成される」ということであり、それは、創造主である神の永遠の計画が実現されることを意味するからです。

1．「神の計画」とは

神が被造物を創造されたのは、三位の交わりの中でご自分たちが味わっておられるえも言われぬ幸せを、もっと多くのものにも共有させたいと望まれたからです。

そして、まず初めに純霊である天使を創造し、続いて、人間を頂点とする各種の物質界の被造物を創造されました。それは、それぞれの被造物をご自分たちの幸せに参与させるための、遠大な「計画」を立てておられたからです。

その計画とは、第二位の御子がキリストとなり、その御子のうちに全被造物を包みこむ、というものでした。そして、その計画にもとづいて、それぞれの被造物が創造されていったのです。

ところが、万物の霊長として創造されたはずの人祖の原罪を皮切りに、人類は加速度的に神の計画からそれる方向へと進み続けるようになりました。

そこで神は、御子が人間の一人となって人類全体を初期の計画どおりの道へと引き戻し、キリスト者を中心とした善意の人たちとともに、神の計画を実現・完成させる道をお取りになりました。その道をキリストとともに歩んでいくことを、ここでは「神の計画への参与」ということばで表現しているわけです。

今回は、現代のキリスト者の使命とされている神の計画への参与のあり方を、「人類間の和解」、「国際協力への努力」、「自然界の保護」という三つの面から考えてみたいと思います。

浦上教会

2．人類間の和解

神から離れ、人間同士がいがみ合うようになってしまった人類社会は、御子によるあがないがなされたにもかかわらず、いまだに神の計画に沿った道を歩いていると言えるような状況にはありません。

現代世界は、交通手段の発達、情報通信網の発達、グローバル化された世界、という状態になっているにもかかわらず、依然として個人、集団、階層、国家間などでの対立があり、さらにそれが暴力やテロ戦争などという形をとったりして、神が望まれる世界とはほど遠い状態にあります。対立し合う者同士が、神の名を使い、「聖戦」という名目で殺りくをくり返す、という状況にまで陥っています。

このようなどろ沼的状況からぬけ出すためには、相手の立場を理解したいという気持ちに支えられた「対話」意外に道はないと、教皇ヨハネ・パウロ二世は、機会があるたびに、命をかけて力説し続けられました。

一方、現代世界の中にも、わずかではありますが、すでに神の計画が実現されたり、そのための試みがなされていると思えるような部分も見られ始めています。

たとえば、最近の日本の福祉や学校教育の分野では、「ノーマリゼーション」という概念が浸透してきています。昔は、ハンディキャップがある人は価値がなく、社会にとっては厄介ものだという考えがありましたが、現在では、ハンディキャップがある人と健常者とが共生できる社会の実現を目指す努力がなされつつあります。

3．国際協力への努力

神は人類を、一人ひとりが互いに助け合い協力し合う、「人類家族」として創造されました。しかし、自由意志を与えられた人間は、人祖から自己の罪を他者になすりつけるような言いわけをし、その子どもたちの一人は兄弟殺しという恐ろしい罪さえ犯してしまいます。すでにそのときから、弱肉強食の時代が始まっていたのです。

この「自分さえよければ」という精神は時を追うごとにますます激しくなっていき、現代にまで引き継がれています。

先進国の搾取によって生じる南北間の経済的格差は拡大し、全世界の富の8割がわずか2割の人々の手に渡ってしまっているといわれます。日本で必要とする食料のわずか2割が国内で生産されたもので、残る8割は海外からの輸入品だということですが、日本人はその全体の2割を食べ残してしまっているそうです。さらに驚かされるのは、先進国全体から貧困国全体への援助食料品の合計量が、日本人が食べ残している量のわずか半分程度でしかない、という事実です。

これらの経済的格差をはじめとするさまざまな不公正問題にまつわる課題を克服するためにも、種々の活動がなされているのも事実です。その中で一般によく知られているものの一つに、「国際連合」があります。しかし、この理想を追求できるはずの機関の活動も、自国の利害を最優先する一部の国々の反対に会ったりして、思いどおりの成果を上げられない状態にあるというのが現状です。

しかし、世界のどこかで大きな自然災害が起きたようなときには、ただちに世界各地で募金活動が行われ、援助の手が差し延べられています。現在は、日本でも、NPO（民間非営利組織）活動をはじめ、各種のボランティア活動が盛んになってきています。中には、単身で海外へおもむき、援助活動を行う人なども出てきています。カトリックの「信徒宣教者会」などの地道な活動も、長年続けられています。

4．自然界の保護

神が創造された世界は、最初はすべてが「良い」ものでした（創世記1・31参照）。しかし、万物の霊長として造られた人間は、他のあらゆる被造物を自分たちの望みどおりに使ったり食べたりしてよいのだと、うぬぼれるようになってしまったのです。そしてその傾向は、一神教を奉じる民族の間で特に顕著に現れてきたようにさえ思えます。

人類は、自然界のさまざまなものを善用したり乱用したりしながら、生活を便利にしたり文明を築き上げたりしてきました。そしてふと気がついたときには、自分たちが住んでいるこの自然界の秩序は乱れ、環境はすっかり破壊されてしまっていたのです。

20世紀も終わりに近づいた時点になって、やっと人類は、自分たちが破壊してきたものを再修復していくべきだとの声を出し始めました。今から努力し始めるならば地球や人類の破滅を食い止めることができるかもしれない、との悲痛な叫びが先進国の間から聞こえるようになり、そのための対策も講じ始められています。神が計画された世界へ向かう道へと、方向転換しようとしているのです。

人類のその歩みを先導する役割りが、私たちキリスト者に委ねられているのではないでしょうか。

〈シリーズ〉共に生きる信仰

パストラルケア

命に寄り添うケア（5）

盛（もり）　克志（かつし）
レデンプトール会司祭
（臨床パストラル・カウンセラー）

生きる意味

私たちは今、どんな時代に生きているのであろうか。簡単にまとめてみると、I.T.（情報産業）、進歩した遺伝学、グローバルな世界の中で生かされているのではなかろうか。そのような中で、人間は時間的存在として生き、過去・現在・未来の時間の流れの中で、過去にとらわれ、未来に希望を持って、現在を生きている。自分の将来を「あんなふうに生きてみたい」「あのようになりたい」との思いで、今を生きているのではなかろうか。さらに、確実にやってくる死の前に「未来」というスクリーンをかけ、死が見えないようにして、今を生きていると思われる。

けれども、死が自分自身の現実になろうとしたとき、未来のスクリーンが取り除かれて自分の明日という希望がなくなったときに、人は今、ここ、現在の意味を問わざるを得なくなる。その時、本当に、「自分とは何か？」が問われてくる。

人は、第三者の説教とか、批判や指示で本当の自分に気づくとは考えられない。最終的に自分が自分で気づかない限り、自ら変わるということはあり得ないであろう。そういう意味で、「気づき」を自分の中で起こさなければ、本当の意味で自分を生きることにはなりえない。そこで、自分への「気づき」へのケアが求められることになる。

深い交わりのために

人が人と出会うため、相手との深い交わりを得るためには、コミュニケーションという手段を使うことがある。パストラルケアにおいても、その手段は必要不可欠である。そのコミュニケーションには、大きく分けると二とおりある。言葉によるコミュニケーションを「言語的コミュニケーション」、そして、言葉を使用しないコミュニケーションを「非言語的コミュニケーション」という。

コミュニケーションにおいて、相手の話を聴く（listen）ことは不可欠であるが、「耳」を通しての言語的コミュニケーションではなく、「目」、「皮膚」、「鼻」などの感覚を通した非言語的レベルでのコミュニケーションも行われている。言語的コミュニケーションとは、会話や文字、印刷物などによる交わりのことであるが、非言語的コミュニケーションとは、顔の表情や声の大きさ、視線、身振り手振り、いわゆるジェスチャーなどによる交わりである。

コミュニケーションにおいて最も大切なのは、言葉を使わない「非言語的コミュニケーション」である。まず相手の目に映るのは表情や身だしなみであるので、自分の笑顔やきちんとした身なりなどが相手の第一印象を良くし、誰からも受け入れやすくさせてくれる。また、身振り手振りを大きくすると、実感があり、説得力が増すことになる。逆に、無表情だったり、身だしな

みが整っていなかったりしたら、本当に伝えたい情報が相手に伝わらなくなることもある。このようなさまざまなコミュニケーションを通して、人は人と出会うことになる。

コミュニケーションには、「話す」ことと「聴く」こと（2005年6月号参照）とがあるが、その「話す」ことの具体的な注意事項を、ここに挙げてみよう。

1. 明確な表現をする
2. 相手が理解できる言葉で話す
3. 相手のペースで語りかける
4. 伝える情報量は適度にする
5. 相手の表情など、身体から出ているサインに目を向ける

ケアとは、愛すること

人をケアすることは、人を愛することの具体的な表現である。聖書には次の言葉がある。

イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」

（マタイ22・37～39）

「ケア」するとは、かけがえのない存在として人々と関わることである。

パストラルケアは、人々が語るその人の生き方、病いや人生への問いについて関心を持ち、共感して聴くことから始まる。具体的には、相手が語る病いの意味、人生の意味などを心から傾聴することであり、人々の苦しみや死に対する怖れにやさしく寄り添うことである。また、答えのない問いに相手と共に向かうことを通して、自己や隣り人との関わりについてもう一度見つめなおし、さらには、神との関わりにについて深く見つめることができるように配慮することでもある。

自分の生きる意味を問うとき、今までの自分が何を考え、何を求め、何を大切にし、何から目を逸らして生きてきたのか、いろいろなことが問題として見えてくる。自分の生きる意味を肯定的に感じられるならば、自分の状態が、身体的、精神的、社会的に望ましくないものであっても、その人は「健康」ないのちを生きていることになる。

しかし、この問いに直面しても、すべての人が肯定的な答えを見出せるとは限らない。そこにはまた、自力の限界の受容などの課題も生じてくる。このような課題をかかえている人々と直接的に関わっていくことも、パストラルケアの役割ではなかろうか。

傷ついた癒し人

人は、自分の魂の動きに集中できるときに、「生きることは愛されていくことである」と知るようになる。そのことに自らが気づいたときに、「生きる希望」、「生きる意味」を持ち、本当の意味で癒しを体験する。

人生において悩み苦しみ傷ついた隣り人に対して、本当に癒し人として協力することができるためには、ケアを提供する人自身が、まず、自分の弱さ、悩み、苦しみに気づく必要がある。その意味でまさに、イエスは「傷ついた癒し人」であった。イエスは、自らは傷も弱さも悩みもない者として、教えたり、人々を癒したりしたのではない。自らの弱さを担い、傷つき、悩む存在として、誠実に自分の傷を担いながら、人の痛みや弱さに真実に寄り添い、癒されたのである。

このようなイエスにならい、自らも傷ついた者として、共に涙する者として、人々に寄り添い、共に歩もうとする人が今求められている。まさに、次の聖書の言葉はイエスご自身を指し示し、パストラルケアの本質を教えてくれよう。

彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。

（イザヤ53・5）

典礼豆知識

＊ピアノを少し習ったことがあるので、オルガン伴奏を手伝うように頼まれたのですが、ミサのどの部分でどんな聖歌を歌うのかよく分からなくて困っています。

主日のミサを例に挙げます。教会や司式司祭によって異なることもありますが、参考にしてください。

入祭の歌・・・祭儀のはじめに、一同の心をその日の典礼に向けて整える歌です。歌が始まると司式者が入堂しますので、司式者と会衆の準備ができたことを確認して弾き始めるとよいでしょう。司式者が自席に着く頃を見計らって弾き終わります。

あわれみの賛歌（キリエ）・・・「全能の神と、兄弟の皆さんに告白します」という言葉で始まる回心の祈りに続けて、「主よ、あわれみたまえ」と歌います。

栄光の賛歌（グロリア）・・・あわれみの賛歌に続けて、「天のいと高きところには神に栄光」と歌い出します。司式者が歌い出すことが多いので、あわれみの賛歌の後、最初の音を出して知らせます。この賛歌は待降節と四旬節には歌いません。

答唱詩編・・・第一朗読の後、少し間をおいて弾き始めます。当日の典礼で歌う詩編は決まっていますので、『聖書と典礼』や『毎日のミサ』などで確認してください。

アレルヤ唱（詠唱）・・・第二朗読の後、同じく少し間をおいて歌います。福音を迎える歌として、当日の典礼に合わせたものがすでに選んであります。答唱詩編同様、確認しておきます。なお、四旬節にはアレルヤ唱ではなく詠唱を歌います。

共同祈願・・・信仰宣言に続いて行われる共同祈願では、意向に合わせて一同が唱える応唱の部分を歌うことができます。旋律と言葉は『聖書と典礼』に掲載してあるものを利用するとよいでしょう。

奉納の歌・・・共同祈願に続いて、祭壇に供え物（パンとぶどう酒と水）の準備が行われている間に歌う歌です。準備が済むと司式者が手を洗いますから、それを目安に終わります。

感謝の賛歌（サンクトゥス）・・・「聖なるかな」という言葉で始まる賛歌で、叙唱と呼ばれる司式者の祈りに続けて歌います。叙唱は典礼に応じて変わりますが、はじめに「主はみなさんとともに」の応答がありますから、これに注意するとよいでしょう。叙唱の終わりには、「天使たち」「歌声」といった言葉がでてきますので、よく聴いておくようにします。

記念唱・・・ぶどう酒の聖別の時、司式者が杯を奉持して会衆に示し、次に祭壇の上に置いて一礼します。旋律が複数ありますから、区別できるよう二音目まで弾くとよいでしょう。長さは二秒程度を目安にしてください。

大栄唱・・・教皇や司教のための祈り、またすべての死者のための祈りの後、奉献文の終わりに司式者がパンとぶどう酒を高く掲げたら、「キリストによって・・・」の最初の音を与えます。これも二音目まで弾くと司式者の助けになるでしょう。

主の祈り・・・大栄唱の後、司祭がパンとぶどう酒を祭壇の上に置いたら、招きの言葉のための音を与えます。なお、何らかの事情で主の祈りを歌わずに唱えることもあります。司式者の招きの言葉に気をつけておくとよいでしょう。

平和の賛歌（アニュス・デイ）・・・平和の挨拶に続けて歌う「神の小羊」のことです。会衆の平和の挨拶の声が聞こえなくなる頃を見て弾き始めます。

拝領の歌・・・聖体拝領行列の間に歌う聖歌です。参列者の数に合わせて、曲数を考慮する必要があります。選曲にあたっては、「聖体」、「交わり」、「一致」などをテーマにしたものを選びます。拝領をする人が少ないなど、状況によっては歌わない場合もありますし、拝領が終わってから一同で歌う場合もあります。オルガニストの聖体拝領はどうするのか、教会の習慣があると思いますので、先輩のオルガニストに尋ねておきましょう。

閉祭の歌・・・派遣の祝福の後、「神に感謝。」に続けて歌うことができます。退堂の行列がある場合は、行列が終わる頃を目安に終わります。

その他・・・「あわれみの賛歌」、「栄光の賛歌」、「感謝の賛歌」、「平和の賛歌」はミサ曲と呼ばれ、一組のものとして作曲されています。そのため、別々にではなく一組のものとして用いるのがよいでしょう。また、記念唱や大栄唱などは、ミサに集中していると忘れてしまいがちです。伴奏譜に印をつけておくとよいでしょう。

（嘉松　宏樹）

Catholic Archdiocese
NAGASAKI

「親子日曜学校」

今年から、「親子日曜学校」で堅信組の要理を担当することになりました。子どもが要理を学んでも親にその心得がないとその効果は半減してしまうことになります。そこで親からの強い希望があり、親子が共に出席する形になったものです。子どもたちの中には、自分がカトリック信者であることを人前では言えないという者もいます。これでは、福音宣教は信仰の証しの祈りですと言っても何の役にも立たないわけです。

子どもたちに、こんな質問をしてみました。

・「君たちは、赦しの秘跡を月に何回しますか？」
　「月に・・・２カ月に一度かな・・・」
・「では、ロザリオのお祈りは毎日する？」
　「う ── ん、わかんない」
・「日曜日のごミサは毎週授かる。そしてご聖体は？」
　「はい！毎週かな」
・「待者（男子）や朗読（女子）は？」
　「うん。当番でする」
・「では、どんな心構えで待者や朗読をしているの？」
　「別に、何も考えない」
・「学校で、信者でない友達に教会に来ることを積極的にすすめる？」
　「はずかしくて・・・言えない」

この簡単な問答は、今日の教会に欠落した面を如実に物語っているように思えてなりません。こう思うのは私の方が間違っているのかな、と一瞬考えさせられたりもします。

よく、「親の顔が見たい」ということばを耳にします。子どもがこうであるなら、親も同じレベルなのだということの表れです。第二バチカン公会議によって教会の刷新が行われ、信徒の役割が明確にされ、信仰の証しが強調されています。その中でも、福音宣教は信徒がなさねばならない「信仰の証し」です。このことは、言うのはたやすいことですが、いざ実行となるとたいへん難しく、信者としての期間が古くなればなるほど難しいようです。しかし、カトリックの信徒は、ミサに与る度に個々人の成長は進んでいっているはずです。

ここで、司祭の役割と信徒の役割が織りなされることとなりますが、意外や意外、この認識が不足しているようです。わたしたち信徒は、いつになっても福音宣教は司祭のものであり、自分には関係がないと思いこみ、司祭は司祭で自分で何とかしなければと責任を感じ、何から何まで自分の仕事として、すべてを抱えこむということが、未だ残っているようです。生意気をいうようですが、ここで司祭が信徒の福音宣教の役割の重要性を強調するリーダーシップを発揮していただきたいと切に願っています。

自分がカトリック信者であることを信者以外の人の前で公表したくない、他人には知られたくない、と思っている信徒が意外と多い段階では、福音宣教は信者同士の啓蒙運動だけということになってしまいます。

日本のカトリック信者の数は一向に変わらないことも残念に思っています。しかし、数字をよく見てみると不思議に司祭の数の足りないところで成人の新しい信者が増え、司祭の数の多いところで増えていないようです。これについては神のみ旨ということでしょう。

この現状を打破するには、親と子が共に学び、人前でも友達にも、自分がカトリック信者であることを、そしてキリストの愛を解き明かし、福音に従って生きることの大切さをより多くの人々に伝えることが大切です。親自身が信仰を強め、子どもが０才～３才までに、遅くとも10才までに自分の行動で教えることが、福音宣教を可能にすると確信しています。

子どもの代で外に向けての福音宣教が積極的に行えるようにとの願いを込めて、「親子日曜学校」となりました。

（カトリック手取教会　三上　晋）

「みことば友の会」の巡礼

10月22～23日にかけて、「みことば友の会」主催による「大分巡礼」が行われた。34名が参加し、個人的にはなかなか回れない巡礼地を選んで行われた。

今回は、この巡礼企画のために前もって準備をしてこられた会員の方に、いろいろと伺ってみた。

◇ 巡礼の始まりは、どういうきっかけでしたか？

教区の神学講座の修了者たちによる「要理教師の会」主催の巡礼で、県北の平戸から長崎までを何回かに分けて歩き通したのがきっかけでした。

4年前に会名が「みことば友の会」と改称されてからも、毎年巡礼が企画されてきました。キリシタン迫害時に信徒が隠れ住んだといわれている、善長谷にも行きました。

◇ そのほかに、今までどこへ行かれたのですか？

原城の殉教祭参加を伴ねた、島原半島巡礼を行いましたし、昨年は、天草日帰り巡礼でした。それは、アルメイダの足跡を辿り、天草にどうしてカトリックが繁栄したのかを理解し、天草を理解することによって、九州全体のカトリックについての理解も深まるのではないか、と考えたからです。

◇ 今回大分巡礼を企画されたのは どういうことからですか？

ザビエルが、1549年8月に鹿児島にやって来ました。1551年9月には大友宗麟との会見が行われていますが、宗麟はそれ以前に、カトリックやインド・ヨーロッパなどのことを知っていたようです。

そこで今回は、九州における初期・カトリックの理解を深める旅を、と考えたのです。

◇ 今回は、大分のどこへ行かれたのですか？

①大友宗麟の記念公園 ②掻懐（かきだき）のキリシタン墓碑 ③磨涯（まがい）クルス ④キリシタン洞窟礼拝所跡 ⑤葛木（かつらぎ）殉教公園 ⑥日出（ひじ）キリシタン仕置き場跡 ⑦ペトロ岐部公園（岐部殉教祭参加）へ行きました。その中には、あまり知られていない場所も3カ所入っています。

＊掻懐（かきだき）のキリシタン墓碑

16世紀から17世紀にかけて作られたものと想定され、墓石の手前に十字が刻まれている。県文化財にも指定されており、現在も子孫が同じ敷地に住んでいる。

＊キリシタン洞窟礼拝所跡

隠れキリシタンが縦穴式古墳を利用したものと考えられ、地蔵を祀って拝んだと伝えられているが、紛れもなく隠れキリシタンの礼拝堂跡である。

地下洞内にある五輪の塔の、下から二段目の石の下面に明瞭な十字が刻んであるし、地下天井の中央にも大きな十字架が薄く認められる。洞内には換気口とみられる穴が掘られており、地上部には礎石が見つかり建物があったことが確認されている。祈りに来た人を迎え、建物内の一部の床板とむしろを取り除いて、洞内に梯子で降りて祈りをした、と伝えられている。

＊日出（ひじ）キリシタン仕置き場跡

日出藩・成敗場が、キリシタンおよび一般罪人の処刑場となっていた。この石碑は、同藩11代の明君木下年慰（としまさ）公が、処刑罪人の冥福を祈るために、菩提寺・松屋寺の住職に依頼して建立したものである。

「大乗妙典石書塔」の大文字が深く刻まれ、法華経の文字を一文字ずつ書いた69384個の小石がこの塔の中に納められている、と考えられている。

◇ 巡礼を終えての感想は？

現在も素朴な形で残っているいくつかの史跡を訪ねましたが、迫害時代には、私たちが知らないもっと多くの人々が、キリストのために命を捧げ、苦しみを耐えながら過ごした日々があったことを思い、その知られざる人々のためにも祈ってほしい、という思いが強くなりました。

また、今私たちが置かれている場でキリストを証ししていく生き方がもっとできるように、殉教者たちの取り次ぎを祈りたいです。

〈委員会の動き〉

家庭委員会より…

毎年2月と9月に、家庭委員会の主催で「結婚講座」を行っています。

その第7日目の「2人で歩む道の価値観」というテーマを担当しておられる増本小夜子さん（NPO法人・おなかの赤ちゃんヘルプライン・代表）に依頼して、法人としての支援活動をしておられる中で、日頃感じておられることを、文章にして分かち合っていただくことにしました。

・愛されたい
・ほめられたい
・認められたい
・自由でありたい
・お役に立ちたい

子どもの五つの願いと言われます。子どもでなくとも、全ての人に当てはまることだと思います。

今、家庭が問われ続けています。一番信頼したい人が信頼できないのです。人は常に自分の存在感、居場所が安定していないと、この五つの願いが崩れてきて、ストレスがたまってくるのではないでしょうか？　子どもの場合、親や先生の前ではいい子でいようという気持ちが普段は自分を抑えているけれども、自分らしさが発揮できず、こうあるべきだと大人から要求ばかりされると、ストレスがたまりにたまって、膨れすぎた風船のように大爆発を起こしてしまうのではないかと思います。

私は小学4年生のとき、一人で母の仕事場に行くために電車に乗って行く途中、その電車が事故に遭い、全員降ろされました。お金もなく、困っているときに、見知らぬおじさんが自転車に乗せてくださって、住吉から長崎駅まで、連れて行ってくださいました。今の時代なら、信じられないことです。「見知らぬ人」も信頼できる時代でした。やっとたどり着いた駅前の母の職場で、母が同僚に「女の子を産んでよかった、やさしいもんね」と言っているのを聞いて、とてもうれしくて、もっともっと優しくしようと思ったことを、よく覚えています。

今、ボランティアで、おなかに赤ちゃんがいて、産みたいけども、経済的な問題や悩みを抱えて困っている女性たちの支援をしています。

ある時、相談の電話を取ると、とても不安そうな声が聞こえてきます。聞いてみると、出産は近づいているのに、借金の支払いに追われ、とてもお産の費用が準備できないし、周りに支援してくださる方もなく、大きなおなかをかかえて、あちこちの相談所に行ってみたが、解決策が見つからない、という方でした。

その後、私たちのほうで支援のめどがつき、その数カ月後、無事に生まれた赤ちゃんを見て、どうか幸せになってね、と祈るような気持ちになりました。

そのお母さんから、こんなお手紙をもらいました。

「今回は出産のために支援していただいて、ありがとうございました。おかげで子どもをおろさずに産めたのは、すごくありがたいことだと思っています。新聞記事を見てすぐに電話したら、親身になって相談にのっていただきました。話を聞いてもらえただけでも、すごく楽な気持ちになることができました。今回のことは、3人の娘を育てていく中で教えていきたいです。特に今回の3番目の子どもには、『あなたが生まれてくる運命にあったから、この素敵な人たちとも知り合えたんだよ』と言いたいです。私たち家族に手を差し伸べてくださり、ありがとうございました。」

たくさんの「産んでよかった」と出会いたいと思います。それが一番最初にできる、子どもへのプレゼントです。もしかしたらその言葉で、その子の一生を支えるかもしれません。

今は、たとえ複雑な事情があっても、産もうとする家族を、女性を、応援して行きたいと思っています。いのちを選択したことには間違いはなかったと信じて、道を切り開いていってほしいと思います。そして、生き生きとして世の中に「お役に立てる」人を育てるのが「家庭」の重要な役割だ、ということを伝えていきたいと思います。

結婚講座の一コマ

生活の中の教会

三浦町教会　　フォトプラン　山本 富夫

街の教会

県北の中心地、佐世保。駅前の小高い丘に建つ白亜の教会堂。

一九三一年（昭和六年）十月、早坂司教祝別。イエズスの聖心に捧げられる。

周囲の建造物は激変した。しかし、教会堂は補修と改修を重ね、七十余年の間、その麗姿を保つ。

小教区独立は一八九七年（明治三十年）三月。平戸地区から分かれ、佐世保地区として創設。

年次報告書には、大島、大崎などを含め、信徒数七五〇と記されている。